

| 日付 | 曜日 | 活動内容 & 場所 |
|-------|----|-------------------------|
| 5月25日 | 月 | National Holiday |
| 5月26日 | 火 | London Transport Museum |
| 5月27日 | 水 | Young V&A |
| 5月28日 | 木 | 坂野真理先生インタビュー |
| 5月29日 | 金 | Foundling Museum |
| 5月30日 | 土 | 休日 |
| 5月31日 | 日 | 休日 |

～ロンドンにおける特別な配慮を要する子ども支援の医療的視点 — Rainbow Forest Centre London から見る教育・保育との連携と課題～
(2026年5月28日)

研修施設：Rainbow Forest Centre London

イギリス制度説明：坂野 真理 先生（子どものこころ専門医）

経歴：児童精神医学、発達障がい支援、子どものこころのケアを専門とする医師。東京大学医学部附属病院小児科・こころの発達診療部、医療福祉センター倉吉病院児童思春期外来などでの臨床経験に加え、英国キングスカレッジロンドン精神医学・心理学・神経科学研究所（IoPPN）での学びを経て、現在は日本と英国の両国で発達支援や児童精神保健に携わっている。特に、「発達特性を“治す”のではなく、その特性を生かして育つ社会づくり」を理念に掲げ、医療・福祉・教育を横断した実践を続けている。児童精神科診療のみならず、保育・教育現場への助言や保護者支援、多職種連携による地域支援にも力を注ぎ、子ども一人ひとりが安心して成長できる社会の実現を目指して活動している。

今回の坂野 真理先生へのインタビューを通じて、英国の特別支援教育および児童精神保健システムは、日本とは異なる理念と制度のもとで運営されていることを学んだ。英国では、特別支援教育を「障害児教育」としてではなく、SEND（Special Educational Needs and Disabilities）という枠組みで捉え、ニューロダイバーシティを多様性の一つとして理解する考え方が広く浸透している。そのため、自閉スペクトラム症（ASD）やADHDなどの特性は「治すべきもの」ではなく、その子どもに合った環境や支援を整えるべきものとして位置付けられている。



乳幼児期においては、日本のような定期健診制度はなく、Health Visitor（保健訪問員）が家庭訪問を行い、発達や養育状況を確認する。ナースリー（保育施設）入園後は教育機関が発達アセス

メントを実施し、必要に応じて SENCO（特別支援教育コーディネーター）が中心となり支援を検討する。英国では診断がなくても支援を開始できることが特徴であり、まずは各教育機関が既存予算内で実施する SEND Support が提供される。

一方で、現場では深刻な課題も見られた。英国政府は近年、インクルーシブ教育の推進を強く打ち出しており、できる限り通常学級で教育を行う方向へ政策転換を進めている。しかし、支援を必要とする児童数は年々増加し、多くの学校で人員・予算不足が深刻化している。資料でも示されているように、SEND Support では学校予算が増えないため、十分な支援が行えないケースが少なくない。実際の学校現場では「支援したいが対応できない」という状況が広がっており、保護者が学校探しに苦労する例も多い。

また、英国の児童精神保健サービス（CAMHS）は、教育・福祉との連携が強い一方で、受診待機期間が極めて長いことも大きな課題である。GP（家庭医）から紹介されても、専門的なアセスメントや診断まで数年待ちとなる地域もあり、発達障害のみでは医療支援につながりにくい現状がある。教育心理士（EP）や臨床心理士（CP）が診断を行うことができ、多職種による支援体制は整備されているものの、実際には需要が供給を大きく上回っている。

さらに英国では、警察、福祉、教育、医療が連携して支援を行う仕組みが発達しており、Youth Offending Service（YOS）などでは、非行や犯罪に巻き込まれた若者を単なる加害者ではなく、支援を必要とする子どもとして捉える視点が重視されている。このような多機関連携の文化は、日本が今後学ぶべき点の一つであると感じた。

一方で、日本には英国にはない強みもある。鳥取県での取り組みを例に、医療・教育・福祉・行政の関係者が顔の見える関係性の中で連携しやすく、必要に応じて迅速に集まり支援方針を検討できる体制についてのお話があった。英国では制度上の連携は整備されているものの、実際には担当者不足や待機期間の長さが大きな課題となっている。

今回のインタビューを通して、英国はニューロダイバーシティの考え方が社会に浸透しており、特別な配慮を要する子どもも地域の学校で共に学ぶことを基本としたインクルーシブ教育が推進されていることを学んだ。一方で、実際の現場で



は支援を必要とする子どもが増加する中で、専門職や人的資源が不足しており、学校が十分な支援体制を整えられていないという課題も抱えていることが分かった。

また、英国では保護者が子どもの進学先を選択する権利が大きく保障されており、学校側は原則として入学を拒否できない仕組みとなっている。そのため、子どもが地域の学校で学ぶ機会は確保されている一方で、入学後の支援体制が十分に整わない場合には、子ども本人だけでなく保護者や学校職員、共に学ぶ子どもたちにも大きな負担が生じる可能性があることを感じた。

今回の学びを通して、インクルーシブ教育とは単に同じ場で共に過ごすことではなく、その子どもに必要な支援や環境調整が十分に保障されて初めて実現されるものであると改めて考えさせられた。子どもの最善の利益を中心に据えながら、保護者、教育機関、医療・福祉の専門職が連携し、それぞれの子どもに応じた支援体制を構築していくことの重要性を強く感じた。

～子どもの創造性と社会参加を支えるインクルーシブな環境づくり～

(2026年5月26日、27日、29日)

視察施設：ロンドン交通博物館 (London Transport Museum)、Young V&A、Foundling Museum

2025年5月26日から29日にかけて、ロンドンにおいて子どもの学びや社会参加を支える施設の視察を行った。今回訪問したロンドン交通博物館 (London Transport Museum)、Young V&A、Foundling Museum はいずれも異なる目的を持つ施設であったが、共通して「子どもを一人の主体的な存在として尊重し、多様な子どもが参加できる環境を保障する」という理念が根底に流れていた。各施設で得た学びと、日本の保育やインクルーシブ教育への示唆についてまとめる。

1. ロンドン交通博物館 (London Transport Museum)

ロンドン交通博物館では、交通の歴史や発展を学ぶだけでなく、「誰もが安心して参加できる環境づくり」が施設全体を通して実践されていることが強く印象に残った。特に SEND (Special Educational Needs and Disabilities: 特別な教育的支援や障害への配慮) の視点が充実しており、SEND-friendly opening、sensory supports、visual story、quiet access、under-5 sessions など、多様な子どもや家族が利用しやすい仕組みが整備されていた。

なかでも未就学児向けの「All Aboard」エリアでは、交通をテーマにしたごっこ遊びを中心に、身体を使った遊びや協同的な遊びが取り入れられていた。子どもたちは遊びを通して自然に他者と関わりながら学んでおり、展示を見るだけでなく「参加すること」が重視されていた。



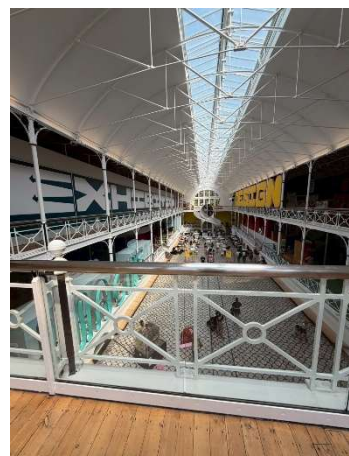
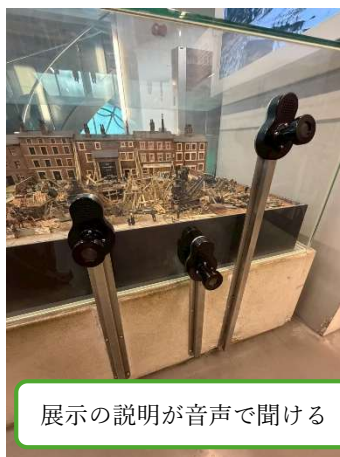
また、展示内容も交通機関の歴史だけでなく、多文化共生や社会参加、ジェンダー、安全性などの社会的課題と関連付けて紹介されていた。公共交通が人々を社会につなぐインフラであり、インクルーシブな都市づくりを支える基盤であることを実感した。

この視察を通して、インクルーシブな環境づくりとは特別な支援を必要とする人だけを対象にするものではなく、誰もが自然に参加できる環境を最初から整えておくことであるという考え方を学んだ。

2. Young V&A

Young V&A では、施設全体が「子どもの創造性を引き出すための環境」として一貫した理念のもとに設計されていた。館内には「Imagine Gallery」「Living Together」「The Stage」「Build It」「Moving & Making」などのテーマ空間が設けられ、展示を見るだけではなく、子ども自身が体験しながら学ぶことができる構成となっていた。

館内には「Creativity starts in our imagination（創造性は想像から始まる）」「Play gets our bodies moving（遊びは私たちの身体を動かす）」などのメッセージが数多く掲示されており、遊びそのものを学びとして捉える考え方が明確に示されていた。子どもたちは試し、作り、演じ、失敗しながら学びを深めており、その過程そのものが尊重されていた。



また、施設全体が非常にインクルーシブな設計となっており、視覚・聴覚・触覚・身体感覚など多様な感覚を使って参加できる工夫が随所に見られた。子どもたちはそれぞれの特性や興味に応じた方法で活動に参加することができ、「みんなが同じ方法で参加する」のではなく、「多様な参加の仕方を認める」という思想が感じられた。

さらに、SEND への配慮も特別な場所や活動として分離されるのではなく、施設全体の中に自然に組み込まれていた。支援を必要とする子どもが特別に参加するのではなく、多様な子どもたちが共に過ごすことを前提とした環境設計は、日本のインクルーシブ保育においても大いに参考になるものであった。

0~2 歳児向けの「Mini Museum」が設置されていたことも印象的であり、乳児期から文化施設に参加する権利が保障されていることに大きな意義を感じた。

3. Foundling Museum

Foundling Museum では、18 世紀に設立された英国初の孤児院である Foundling Hospital の歴史を学んだ。展示では、当時の子どもたちの暮らしや教育、文化活動の様子が紹介されており、子ども支援の歴史的な背景を知ることができた。

最も印象的だったのは、子どもたちへの支援が生活保障や経済的援助にとどまっていなかったことである。安全な生活環境を提供するだけでなく、教育を受ける機会や音楽・芸術に触れる機会を積極的に保障していたことが伝わってきた。

展示では、子どもたちが合唱や楽器演奏に参加していた歴史や、美術作品を通して社会とのつながりを持っていたことが紹介されていた。これらは単なる余暇活動ではなく、子どもたちが自らの可能性を発見し、自尊感情を育むための重要な機会として位置付けられていたと感じた。

また、作曲家ヘンデルや画家ホガースなど、多くの芸術家が子どもたちの支援に関わっていたことも印象的であった。芸術や文化は寄付を集めるための手段であるだけでなく、子どもたちが豊かな文化に触れ、一人の人間として尊重される環境づくりにも大きく寄与していたことが理解できた。



この視察を通して、子どもの育ちを支えるためには、福祉や生活支援だけでなく、教育や文化、芸術に触れる機会を含めた総合的な環境づくりが重要であることを改めて学んだ。

今回視察した3施設は、それぞれ博物館、子ども向けミュージアム、歴史資料館という異なる役割を持っていたが、共通していたのは「子どもを支援の対象としてではなく、社会の一員として尊重する」という考え方であった。

ロンドン交通博物館では、誰もが参加できる環境づくりの重要性を学び、Young V&A では、遊びを中心とした創造的でインクルーシブな学びの環境を体験した。また、Foundling Museum では、子どもの権利や尊厳を守るためには、福祉だけでなく教育や文化へのアクセスが不可欠であることを学んだ。

これらの施設に共通していたのは、「支援を必要とする人に後から配慮を加える」のではなく、最初から多様な人々が参加できる環境を設計するという考え方である。インクルーシブ教育とは特別な取り組みではなく、誰もが自然に参加し、学び、成長できる環境をつくることであるということに改めて実感した。

今回得た学びを、今後の保育実践や地域の子育て支援に生かし、すべての子どもが安心して育ち、自分らしく参加できるインクルーシブな環境づくりにつなげていきたい。

～イギリス豆知識&カルチャーショック～

イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの地域からなる国であり、面積は日本の約3分の2の広さである。人口は約6,900万人。今週のイギリスは熱波に見舞われ、30℃を超える日が続いている。しかし、公共交通機関や住宅、飲食店にはエアコンが設置されていないことが多く、異常気象を肌で感じる1週間であった。

また、大英博物館や自然史博物館、ナショナル・ギャラリーをはじめとする多くの美術館や博物館が、観光客も含めて無料で開放されていることにも驚かされた。世界的に貴重な文化財や芸術作品、自然史資料を誰もが気軽に見学できる環境は非常に魅力的であり、文化や学びを大切にするイギリスらしさを感じたのである。



町中に溢れかえる赤い2階建てバス。地下鉄より断然安く、市民の足である。



→躍動感溢れる馬の絵画。
National Galleryにて。

←幼少期（ピーターパンのビデオで！）数えきれないほど見たビッグベンの時計。



→イギリスの地下鉄。線路が走る穴はほぼ電車の直径に合わせたようなギリギリサイズ?! 電車が穴に消えていく姿はまるでミミズの様であった。

